

1. 端建蔵橋は約2年半にわたり通行止めとなります

端建蔵橋の架け替えに伴い、令和4年9月15日から令和7年3月31日までの間、通行止めを行います。長期間にわたり、ご迷惑をおかけいたしますが、ご理解とご協力をお願いいたします。下の写真は9月15日夜間より開始した通行止めの様子を撮影したもので、警察の方々をはじめ、多くの関係者の協力のもと、通行止めを行いました。その際には道路の白線の引き直し、信号機の撤去なども行っています。

端建蔵橋架け替え工事による通行止めや迂回路につきましては、下記の大阪市ホームページにて詳しくご案内しております。

【大阪市 HP：端建蔵橋通行止めのお知らせについて リンク先】

<https://www.city.osaka.lg.jp/kensetsu/page/0000570101.html>



▲迂回路について（詳しくは HP 掲載）



▲通行止め開始の様子（9月15日23時頃）



▲南側から北側に端建蔵橋をのぞむ

2. 端建蔵橋の架け替えについて

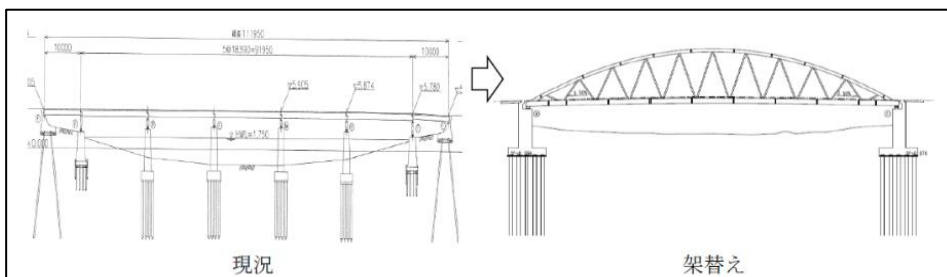
端建蔵橋は架設から100年以上経過しており、これまでの様々な部分的補修・補強を行ってきましたが、今回の架け替えに至りました。本橋の架け替えにより、これまで塗装塗り替えが難しく腐食の進行が避けられなかった構造が解消されるとともに、地震などに対してより強い橋になります。

本工事では、現況の桁橋からアーチ橋への架け替えを予定しています。アーチ橋への変更に伴い橋脚がなくなり、船舶が航行しやすくなります。さらに、アーチ橋を採用することで工期が大幅に短縮され、交通渋滞による周辺エリアへの影響を最小化することが可能です。

また、橋の上では両側の歩道幅員が1mずつ広がり、歩きやすくなります。完成後のアーチ橋はライトアップを予定しており、中之島西端の新たな景観スポットになることが期待されています。



▲特殊部位の腐食



▲端建蔵橋の架け替えの様子（イメージ）

3. 端建蔵橋を振り返ります

端建蔵橋は中之島の西端に位置し、土佐堀川に架かる橋です。架設されたのは1921年(大正10年)で戦前より人々の生活を支えてきました。小説家宮本輝氏の作品「泥の河」では、戦後まもなくの頃、端建蔵橋と隣の昭和橋に人が集まり、活気あふれる情景が描かれています。

端建蔵の名前の由来については、中之島の西端に蔵が建てられていたからという説の他に、付近に建てられた蔵が“はだし蔵”と呼ばれていたからという説があり、江戸時代の名残をいまに伝えています。



▲かつての端建蔵橋

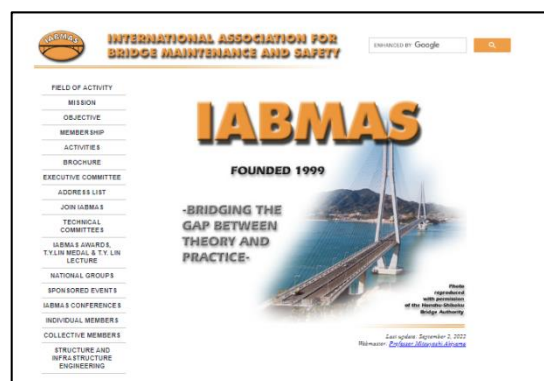
4. IABMAS 2022 にて堂島大橋の長寿命化対策について発表しました

令和4年7月11日～15日、スペインのバルセロナでIABMAS 2022が開催されました。IABMAS(International Association for Bridge Maintenance and Safety)とは橋梁構造にかかわる様々な技術・研究成果を融合・発展させ、橋梁構造のメンテナンスや安全性、マネジメントの発展に資する成果を発信するために設立された国際学会です。

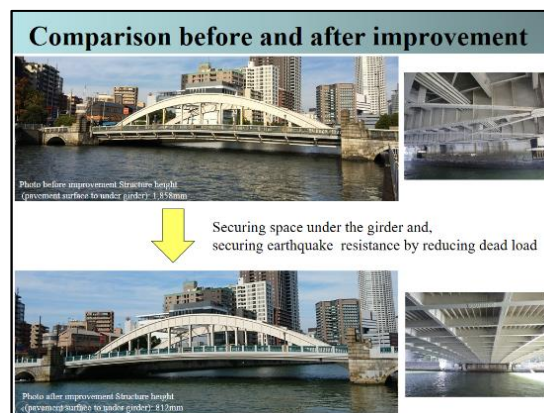
大阪市はこれまで、フィラデルフィア(アメリカ)やストレーザ(イタリア)で開催されたIABMAS主催の国際会議において、橋梁の維持管理に関する計画やその技術について発表してきました。

今回はコロナ禍ということもあり、リモートで参加しました。

今回発表した「堂島大橋の長寿命化対策」は、完成から90年以上経過した堂島大橋のアーチ部や下部工を残しつつ、床組・床版を全面的に取り替えるという、高齢橋梁に対して前例のない長寿命化対策を行ったものです。歴史的・文化的価値にも配慮し、橋の特徴を活かした長寿命化対策は、今後の橋梁メンテナンスにも貢献し、技術継承に資する有意義な事例として評価されています。また、令和3年度には土木学会田中賞を受賞しております。



▲IABMAS ホームページ



▲発表スライド

【IABMAS2022 参考リンク先】

<https://congress.cimne.com/iabmas2022/frontal/default.asp>

◇vol.10 大阪の歴史と橋

橋コラム

太閤秀吉の時代から人工的な堀川の掘削が本格化しました。当時の堀川は、お城を守る役割に加え、堀川を利用した舟運による物資の運搬機能も果たし、商業の町、大阪を大いに繁栄させていきました。大坂城築城に際して掘られた「東横堀川」と「天満堀川」の外堀完成以降 50 年で、10 本を超える堀がつくられましたが、そのほとんどが町人の手によるものであり、商人の町の特徴といえます。

堀が掘られて城下町が形成されると、特に東横堀川と西横堀川に挟まれた【船場】を中心に同業者町が栄えるようになりました。【船大工】【鍛冶屋】【材木屋】などの同業者町がそれぞれの場所で形成されたようです。堀にはたくさんの橋が架けられましたが、そのほとんどの橋が『町衆の自腹』で架設されました。自分たちの商業の発展に向けた、今の言葉で言うと、先行投資や設備投資にあたるものであったと考えられます。

宝永(1704 年～1711 年)の頃に水の回廊といわれる市内中心部に架かっていた橋は、町衆が築いた堀川と橋の景観から、江戸時代には【浪華八百八橋】と呼ばれ、「江戸の八百八町」「京都の八百八寺」と並び、当時の大阪の景観を代表していました。これらの言葉は、本当に 808 ヶ所もの寺や橋があるわけではなく、それほど勢いで寺や橋が立ち並んでいたことの比喩的表現でした。実際、江戸時代では、元禄 14 年の(1701 年) 136 橋という記録が残っており、最大でも 200 橋に満たないほどであったといわれています。一方、江戸(東京)の町に架かる橋は、約 350 橋と、大阪に比べて遥かに多かったといわれています。大阪が【八百八橋】と謳われたのは、そのほとんどが町衆によって架けられ、愛着を持たれていたことに理由があるようです。

このような橋は「町橋」と呼ばれ、江戸時代には、【公儀橋】と【町橋】という橋の呼び方が存在しました。【公儀橋】とは幕府が直轄管理する橋で、軍事的、政治的にも重要であったといわれています。当時、江戸(東京)にあった約 350 橋のうち、半数以上が【公儀橋】でした。一方、大阪の【公儀橋】は 12 橋と、江戸に比べて少なく、その他多くは【町橋】でした。【町橋】は、地元の有力商人や橋詰の町が、橋の管理に責任を持って架換などの費用をかなりの割合で負担し、残りはその橋を利用する町で負担していたといわれています。こうした理由も「浪華の八百八橋」と呼ばれた理由の一つかもしれません。

それぞれの橋にも歴史があるので、興味を持たれた方は、ぜひ検索してみてください。

東横堀川	1583年
天満堀川	1598年
西横堀川	1600年
阿波堀川	1600年
道頓堀川	1615年
京町堀川	1617年
江戸堀川	1617年
長堀川	1625年
立売堀川	1626年
海部堀川	1624年
薩摩堀川	1630年
堀江川	1698年
難波新川	1733年
高津入堀川	1734年
桜川	年度不詳



◀堀川の様子